

三宅島

ふるさとだより

N049

平成27年3月1日

三宅島全島避難解除10年

2000年に発生した三宅島(三宅村)の噴火災害で、全島避難指示が05年に解除されてから1日で10年がたった。噴火前の約7割にあたる約2700人が島に戻ったが、火山ガスへの懸念や高齢などを理由に帰島をあきらめた人たちもいる。周囲に支えられて島外の生活になじむ姿がある一方、孤立しがちなお年寄りの日常も浮かぶ。【武本光政】

練馬区にある都営住宅の集会所で1日、毎週恒例の「サンデーカラオケ会が開かれた。自治会のお年寄りのたちが集まり、酒井一豊さん(71)は三宅島特産のアシタバを配って回った。島を離れた都内の住民を支援するボランティアグループ「三宅島ふるさと再生ネットワーク」(ふるさとネットワーク)から届いたものだ。

「皆さんのように避難島民を温かく受け入れて、支えてくれる人々によって、避難在居者は生活を続けられております」。ふるさとネットワーク会長の佐藤就之さん(79)は三宅島特産のアシタバを配って回った。島を離れた都内の住民を支援するボランティアグループ「三宅島ふるさと再生ネットワーク」(ふるさとネットワーク)から届いたものだ。

「皆さんのように避難島民を温かく受け入れて、支えてくれる人々によって、避難在居者は生活を続けられております」。ふるさとネットワーク会長の佐藤就之さん(79)は三宅島特産のアシタバを配って回った。島を離れた都内の住民を支援するボランティアグループ「三宅島ふるさと再生ネットワーク」(ふるさとネットワーク)から届いたものだ。

帰島あきらめた人も

火山ガス、高齢など理由に



自治会の仲間に三宅島特産のアシタバを手渡す酒井一豊さん

酒井さんは三宅島の農協で働いていたが、00年7月に島中央部の雄山が噴火し、同9月に島から避難した。翌年、糖尿病が判明、島外で知り合った女性(46)と結婚したこともあり、島に戻らないと決めた。生活保護を受け、05年9月から、この都営住宅で暮らす。自身もふるさとネットワークで副会長を務め、避難者たちへの訪問活動を重ねた。「俺はずうずうしいからいいけど、周りにない人が多い。島では元気があったのに、しょうぼりしてね」と明かす。ふるさとネットワークが把握できている都内の避難者で人生が狂ったね。いまだに避難者、噴火

島民は100人程度にとどまる。1人暮らしの高齢者も多い。二日、声を出さなかった。酒井さんが訪ねると、そう打ち明けた人も少なくないという。島戻った村民も暮らし振り返る。島で暮らす村民らも、それぞれの10年間を振り返った。レストランを経営していた木村光江さん(85)は現在、島北部の村営住宅で暮らす。島東部にあった店舗兼自宅が火山ガスで傷み、解体を余儀なくされた。「私はまだに避難者、噴火で人生が狂ったね。家族だらけ、地域コミュニティが崩壊し、これまでの東電の賠償では不十分としている。東電は「訴状が届いていないので詳細は承知していない。請求内容や主張を詳しく聞いた上で対応したい」としている。

そは店を営む渡辺孝男さん(66)は火山ガスの規制を受け、13年10月まで元の場所での営業を再開できなかった。生まれ故郷の新潟で店を探したこともある。人口減少で客足は戻らないが、「働けるのが一番いい」と笑顔を見せた。

1歳の長男を育てる引間和歌子さん(40)は埼玉県出身。6年前に島の診療所で働き始め、島で出会った夫と結婚した。「みんな子どもを島の宝と見守ってくれる。安心して暮らせる島のために役立てれば」と話した。【川口裕之】

旧避難準備区域住民が集団提訴
国と東電に賠償求める
東京電力福島第一原子力発電所事故で自然豊かな地域での生活を奪われたとして、福島県田村市郡路地区の旧緊急時避難準備区域の住民105世、339人が9日、国と東電に対し、1人当たり1100万円の慰謝料など総額約37億3千万円の損害賠償を求め、福島地裁郡山支部に提訴した。訴状によると、原発事故前の自然豊かな生活や